

写真で見る西武ヒストリー(後編)

Ⅳ 再構築期(2004～2016)

2011

3・11～震災支援

問われたのは、生まれ変わった西武の本質。西武グループができること、すべきこと

社長の私信

2011(平成23)年3月11日。東北地方を未曾有の大地震が襲った。西武グループ各社に施設などの大きな被害はでなかったものの、上場を目指して苦闘を続けていた西武グループは、思わぬかたちで難しい事態に直面した。

震災直後には、一部のホテルやスキー場では前倒して冬季の営業を終了するなどの措置を余儀なくされた。プリンスホテルも内外からの相次ぐキャンセルに苦しんだ。

また東京電力の福島第一原発事故による電力不足の懸念から、関東以北で計画停電が断行された際には、西武鉄道、伊豆箱根鉄道において通常のダイヤでの運転ができなくなる事態になった。

そうしたなか、後藤社長はさまざまな会議体や、社内イントラネットweb-ism内の「社長ブログ」を通して、全社員に向けて自らの言葉を配信した。

要点を5つに分け、非常時であることを認識し、対応することを説いた。

そして要点の5つ目を「明るく元気な挨拶を敢行すること。」で締めくくった。

西武グループのスローガンは「でかける人を、ほほえむ人へ。」である。社員一人ひとりがうつむいていたのでは、これを実行することはできない。社長メッセージにはそうした思いが込められていた。

西武グループの役割

5つの要点以外に、後藤社長は西武グループの社会的な使命についても語った。

最初に挙げたのは、やはり「グループビジョン」だった。「グループ理念」を読み返すと、こううたっている。

「私たち西武グループは地域・社会の発展、環境の保全に貢献し、安全で快適なサービスを提供します。また、お客様の新たな感動の創造に誇りと責任を持って挑戦します。」

まさにこの部分に、西武グループの役割は集約されている。



営業終了した
グランドプリ
ンスホテル赤
坂に避難され
た入居者から
の寄せ書き

後藤社長は続けて「私たちがいまやるべきことは、企業活動を通して、被災地、そして日本に元気を提供すること」と宣言した。

社員たちも具体的に動いた。被災地の復興支援の一助として、各種イベント開催による支援という方法もあった。全国のプリンスホテルでは東北地方の日本酒フェアを開催したり、西武園ゆうえんちではイルミネーション点灯式に被災地の親子を招待した。BIGBOX東大和では、チャリティーオークションを開催、ダイドードリンコアイスアリーナでは、近隣に避難している被災者の方々を対象に、無料でアイススケート教室などを開催した。

さらに震災後の電力不足に対応するため、グループ各社・各事業所の一部ではサマータイムの導入や本社部門などを中心にスーパークールビズを初めて導入した。OA機器や空調機器などの使用をギリギリまで削減することで節電を重ねた。

こうした取り組みは、その時だけで終わってしまったのでは意味がない。グループ各社は危機管理や安全対策のための意識を後に伝える取り組みも同時に始める。

西武鉄道では、各自治体のハザードマップを収集し、災害が想定される箇所を確認するなどの事後対策をおこなった。

これらさまざまな取り組みやそれぞれの思いを風化させまいと、グループ報「ism」において、「東日本大震災から学ぶこと」と題した臨時号を発刊し、西武グループ内の被害状況、震災当日の対応記録、また各種対応、さらにグループ社員・家族の声をまとめた。

各社の対応と復興支援



西武鉄道は震災発生から7時間で運転再開を果たした

① 西武鉄道 〈運転再開〉

震災当日。都内の公共交通網は軒並み機能不全に陥った。西武鉄道の総合司令では張りつめた緊張感のなか、司令員が乗務員と無線で連絡を取り合い、慌てた様子もみじもなく、本社では対策本部を設置し、それぞれの役割を全うした。

西武鉄道としても線路の安全を確認するまでは再開を宣言することはできない。しかし各駅には帰宅できず途方にくれる乗客があふれていた。JRをはじめ各鉄道会社が当日中の運転再開を断念するなか、震災発生から7時間後の21時55分、新宿線の一部で運転再開を決定。公共交通の役割を果たした。



グランドプリンスホテル赤坂での被災者受け入れの様子

② プリンスホテル 〈避難者受け入れ〉

東京ガーデンテラス紀尾井町に建替えるために営業終了したグランドプリンスホテル赤坂を急遽、開放。2011(平成23)年4月9日～6月30日までの約3ヵ月間に限り、福島県からの避難者を最大788人受け入れた。

ボランティアとしては、西武グループ社員、延べ約900人が参加した。受け入れ最終日に避難者の方々から受け取った感謝の手紙や寄せ書きは、いまもグループで大切に保管されている。

また、雫石プリンスホテルでも被災者に対し約50室の客室を提供した。



グループをあげて被災地支援の募金活動はおこなわれた

③ 西武ホールディングス 〈募金活動〉

義援金・募金活動もグループをあげておこなわれた。西武ホールディングスとしては、日本赤十字社を通して1億円を寄付。また西武バスも日本バス協会へ義援金を寄付した。

西武ドーム(現・西武プリンスドーム)では国際バラとガーデニングショウの売上の一部を、横浜・八景島シーパラダイスなどでも募金箱を設置することに加え、売上の一部を支援団体に寄付した。

西武ライオンズは、選手による街頭募金活動などで義援金集めに参加。まさにグループ一丸となつての活動だった。



被災者を招待した西武ライオンズ主催試合は数回にわたっておこなわれた

④ 西武ライオンズ 〈試合への避難者招待〉

地域社会に貢献する活動として、西武ライオンズも一肌脱いだ。

2011(平成23)年の5月と6月。西武ドーム(現・西武プリンスドーム)と埼玉県営大宮球場での主催試合に被災者の方々を招待した。東日本大震災の影響で埼玉県内の各市町村施設に避難している全ての方々を対象だった。